

「JLP 祭 2018」^{まつり} 報告

小澤 伊久美 国際基督教大学

1 はじめに

本稿では、2018 年度秋学期に日本語教育プログラム（以下、JLP）全コースが参加して実施した「JLP 祭（まつり）」について、その目的や内容などを、活動の記録として報告する。

2 目的

JLP は、多様な文化や価値観の中で相対的な視点を持ち、社会に貢献できる人の育成を目指し、次の 2 点を目標として言語教育を行っている。

1. 大学内外における学術的また社会的活動において、他者との関わりを持ちながら大学生としての生活を送るために必要な日本語の力の養成。
2. 大学卒業・修了後も日本内外で社会の一員として能力を発揮し、社会に貢献するための土台となる日本語の力の養成。

これらの目標を掲げて日本語を教えている JLP にとって、国際基督教大学（以下、ICU）の中で JLP の学生が日本語で交流する場が多くあることは大変重要である。また、JLP の学生とそれ以外の学生との交流はもちろんだが、JLP の学生同士も履修コースを越えて交流できる場があれば互いから刺激を受けられて良い結果をもたらすだろう。そのような出会いは、JLP 以外の授業の履修や、学生寮での生活、クラブ活動への参加で自然と得られるはずであるが、昨今、それだけでは十分な接点が得られない学生も少なくないように見受けられる。さらに、その交流が挨拶や日常会話レベルの皮相なやりとりで終わってしまう学生もいることから、JLP として、もう少し意見のやりとりができるような交流の場を作ろうと考えた。

一方、JLP と接点が少ない学生や教職員から「JLP のことがよくわからない」という声を聞くことも少なくない。しかし、ICU のコミュニティ全体に JLP についての理解を深めてもらうことは、JLP がよりよく運営できる環境を整えるために不可欠であり、JLP は学内においても認知度を高めるべく、広報活動を展開する必要に迫られていると言えよう。

このような背景から、JLP の学生にとって日本語で交流をする場として、そして、JLP から発信する場として、2018 年度秋学期に「JLP 祭」というイベントを企画することになったのである。

3 内容

秋学期は「大学生のための文章作成」と「日本語演習 B」を除く、全ての JLP のコースが開講されており、これら全てのコースの履修生が参加できるようにするため、大学食堂を会場とした。JLP 祭は、ICU の学生や教職員などに公開の形を取り、関心があ

る人には聴衆として参加することを呼びかけた。

開催時期は、中間テストの直後とし、具体的には10月12日（金）に実施した。それぞれのコースが授業を開講する時間帯にあわせて開催し、授業として参加を義務づけた。したがって、午前は〈外国語としての日本語〉プログラムのうち、入門レベルの「日本語ステップ」と上級レベルの「日本語演習A」以外の全コースが参加し、午後は〈第1言語/継承語としての日本語〉プログラム（Special Japanese Program）の全コースと前述の「日本語ステップ」と「日本語演習A」が参加することになった。

午前と午後ではJLP祭として実施した活動の内容が異なるので、以下、実施した時間帯ごとにJLP祭の内容を説明する。

3-1 午前の部

午前は、各コースが学期末に向けて準備を進めているプロジェクトの中間報告など、総合的な活動を日本語で披露する場として企画したが、学生数が多かったこともあり、個人による発表ではなく、各コース内にグループを作り、グループごとに発表することを基本とした。

その上で、同じコースの学生同士も互いの話を聞き合えるように、各コースで学生を前半発表組と後半発表組に分け、発表しない時間帯には自分のクラスもしくは他のコースの学生の発表を聞きに行くという形を取った。また、「集中日本語:初級」（以下、Int 初級）と「集中日本語:中級」（以下、Int 中級）の学生たちはグループには分かれず、コースごとに全員で一つのスキットをしたり、歌を歌ったりすることとし、それを披露する時間には全コースが発表を止めて、集中日本語コースの学生のパフォーマンスを見ることにした。「日本語:J7」（以下、J7）は発表をせず、事前の広報活動に従事した他、当日は分担して各コースの様子を取材し、後日報告する活動を行った。J7の活動については3-3に記載する。

当日のスケジュールは表1、各コースの学生の取り組みは表2の通りである。参加義務のあるJLP生は119名で、その他、JLP以外の学生や教職員が聴衆として参加していた。

表1 JLPの学生のスケジュール

8:50	食堂に集合し、設営など、準備にあたる
9:20	開会
9:25	第一部（35分）：グループごとに発表をする/みる①
10:00	第二部（25分）：全員一斉に発表をみる
10:25	第三部（35分）：グループごとに発表をする/みる②
11:00	閉会、片付け
11:20	解散

表2 各コースのパフォーマンス

J1	丸テーブルを利用。自分の国などを紹介。
J2	ポスターボードを利用。日本の中で行ってみたい場所を、写真を見せながら説明。
J3	丸テーブルを利用。お気に入りの物を実物や写真で見せて説明。
J4	プロジェクタを利用。動画や写真を見せながら ICU キャンパスを案内。
J5	ポスターボードを利用。留学生に役に立つ店を、写真を見せながら紹介。
J6	ポスターボードを利用した個人発表。インタビュープロジェクトの中間報告。
J7	この時間の中で発表はせず、この祭の広報や当日の取材を担当。
Int 初級	第二部の出し物として、演歌から J-pop、アニメソングなど日本の歌を何曲か歌う。
Int 中級	第二部の出し物として、昔話の「舌切り雀」を演じる。



当日の様子（午前の部）

注 集中日本語コースのパフォーマンスを収めた動画は Facebook¹ で視聴できる。

3-2 午後の部

午後は、週に2日しか授業がないコースが参加する形となったが、各コースのプロジェクトの中間報告はグループ単位ではしにくいこと、それとは別に当日パフォーマンスすることを決めて準備するのは時間的に難しいことを踏まえ、事前準備はなしで当日来て参加できる活動を行うことにした。また、日本語力の差が大きい学生の集団になることから、午後の部の主な目的は、日本語を用いて、①学生同士がお互いを知ること、②自分を振り返ること、③ICUの中で学生たちの存在を示すこととした。ただし、②については新入生リトリートとは趣を変えた活動にすることを意識し、体育科の藤樫亮二先生にチームビルディング²を指導していただくことにした。必要に応じて英語でも指導して下さることになっていたが、藤樫先生が活動を指示するときに実演して下さり高度な言語的要素のない活動を選んで実施して下さったため、また、学生自身もグループ内で互いに日本語と英語、ジェスチャーを使って助け合って活動を進めたため、結果として英語で指導していただくことなく進行できた。

当日のスケジュールは表3の通りである。参加義務のあるJLP生は123名で、その内訳は、〈外国語としての日本語〉プログラムの学生26名（入門レベルの留学生17名、上級レベルの学生9名）、〈第1言語/継承語としての日本語〉プログラムの学生84名である。各チームにはJLP教員もメンバーとして参加した。その他、午前の部に参加した集中日本語の学生の一部も4限の時間帯に参加していた。

表3 JLPの学生のスケジュール

13:50	食堂に集合し、設営など、準備にあたる
14:20	開会
14:25	活動
15:45	活動終了、振り返りシートにコメントを書く
16:00	閉会、片付け
16:20	解散

当日の様子（午後の部）



3-3 J7の学生の活動：広報と当日の取材

前述のようにJ7の学生は当日発表をせずに広報や取材をしたが、その理由は大きく3つある。まず、学期末に向けて取り組むプロジェクトの中間報告をするには週に3日しか授業がないため、時間的に準備が間に合わないこと、また、プロジェクトは個人発表の形式を取らざるを得ない内容であるが、学生数が多く、午前の部の時間内で全員に発表の機会を与えるのが難しいという点である。次に、日本語力の低いレベルの学生のパフォーマンスに対して、先輩としてコメントをする機会を設けることは、コメントをするJ7の学生にとっても、コメントをもらう他コースの学生にとっても有意義なやりとりになると考えられたためである。もう一つは、イベントの広報をすること、それも自分たちについてJLP以外のICUの構成員に広報をすることは、相手や場面など諸条件を考慮して適切な表現を選択することであるため、J7のレベルで取り組む課題として適切だと考えられたからである。

JLP祭の広報は、日英両語のポスター(図1)の作成と掲示、口コミや電子ファイルを用いた情報の拡散に努めた他、学長他に招待状を送付する形を取った。また、JLP祭に連動してデザイン公募による「JLP Tシャツ」を作成したのだが、J7の学生は公募の告知を担当した。具体的には、JLPの学生・元学生からデザインを公募してJLP祭当日に投票を実施、最多得票数のデザインでTシャツを作成して希望者に実費で販売したが、J7の学生は公募の実施方法の決定、公募告知のためのポスター(図2)の作成と広報、デザイン案の取りまとめまでを担当した。投票の実施、集計、販売は教員が行った。最終的に販売となったJLP Tシャツのデザインは図3の通りである。



図1 JLP祭のポスター



図2 JLP Tシャツのデザインコンテストのポスター



図3 販売されたJLP Tシャツのデザイン

当日は分担して全コースの発表を聞きに行き、発表者らとのやりとりをしたが、その結果は後日、口頭もしくは文書で報告する形を取った。日本語のレベルが最も低いJ1から中級の終わりであるJ6までの発表については、どの報告でも、それぞれのレベルで学生たちが日本語で一生懸命に情報や気持ち、考えを伝えていたことが指摘され、アットホームで楽しい雰囲気の中で他の学生たちから様々なことが聞けて内容面でも日本語

の面でも感心したということが言及されていた。また、集中日本語のコースの学生たちの歌や演技も堂々としており、楽しく見ることができたと述べていた。

その上で、J7の自分たちも何か発表したかったなど、他のコースの学生たちのパフォーマンスが動機づけとなったことが見られるコメントや、せっかく多様な背景の学生と交流できる機会なので、これはJLPの学生の中だけでなく、もっと学内の多くの人に来てもらって交流したら良い企画だったというコメントが多く見られた。そして参加者を増やすためには、開催日や場所を検討したり広報をより積極的に展開したりするのはどうかという提案や、活動内容の提案など、次回への改善につながるコメントも複数あった。

4 振り返りと今後の課題

前節でJ7の学生から、午前の部についてはあるが、全体的に肯定的な評価が得られたことを報告したが、他のコースの学生たちからも、また、JLP教員からも総じて「JLP祭をやってよかった」という感想が聞かれた。また、秋学期はJLPの学生数が多く、同じレベルでも複数セクションに分かれて運営されていたコースがいくつかあったこともあり、学生からは「異なるセクション、異なるコースの学生と接する機会があって良かった」というコメントがあった。学生にとって良かっただけではなく、教える側にとっても、JLPで教えるようになって日が浅い教員から「ICUでは初級レベルから運用中心のカリキュラムであることがわかって良かった」という声があるなど想定していた以上に有意義だったようだ。

午後の部についても、例えば、日本語入門コースの学生からは、今の日本語力でもコミュニケーションができることを実感したので、もっと日本語を使いたい気持ちになったというコメントや、多様な学生と知り合えたこと、特に〈第1言語/継承語としての日本語〉プログラムのような学生が存在すること、それもこれだけの人数がいることに初めて気づいて驚いたというコメントがあった。その逆に、〈第1言語/継承語としての日本語〉プログラムの学生からは、「様々な国の人が大勢いるのに気付いた、多文化環境にいることを自覚した」という振り返りコメントがあり、ICUの中にある多様性に気付くきっかけとなったことがわかった。こうした学生たちのコメントを見ると、JLP祭は当初目的としていた通り、学生同士が日本語で交流する場、JLPについて発信する機会となったと思われる。

しかし、課題や改善点がないわけではない。J7の学生のコメントにあったように、JLP以外のICUの構成員にもっと多く参加してもらえるような仕掛けが必要だということが第一点である。その他、JLP祭の時間中に食堂を利用しようとしていたJLP以外の学生に利用を断らないとならなかったこと、参加者の人数に比して場所が狭かったことなど、開催場所も要検討である。ポスターボードやテーブルと椅子の移動、音声機器の動作確認などにも時間がかかり、ややせわしない雰囲気が生じてしまったところがあるのも残念だった。また、参加者を増やすためだけでなく、JLPの学生にとっても他科目の中間テストの時期と重なると負担である可能性を考えると、時期についても再考

の余地がある。

午後の部については、JLP の授業としてはもっと日本語を用いる活動にするほうが良かったのではないかと、参加することで日本語が上達したと実感できる内容が良かったのではないかと、今回のような活動であれば時間を1時間程に短縮するほうが良いのではないかという意見があり、いずれも次回開催する場合には検討したい点である。また、チームビルディングの活動の中で、他の学生との近距離での活動やボディ・コンタクトがある活動が多かったことから、そうした点に抵抗を感じた学生が若干名いた点も留意が必要だろう。昨今、様々な点で配慮の必要な学生が多く、こうした面でも事前に配慮のあり方を検討しておく必要があると言える。

5 終わりに

以上、本稿では、今年度初めて実施した「JLP 祭」について、その目的と活動の内容を報告するとともに、良かった点と課題とを振り返った。学生同士が日本語で交流する場、JLP について発信する場としての「JLP 祭」は概ね目的を達したと言えるが、検討の余地がある点も少なくなかった。次回開催する場合には、そうした点について改善できるよう考えたい。

注

1. JLP の Facebook Page: <https://www.facebook.com/ICU.JLPs/>
2. チームビルディングとは、同じ一つのゴールを目指し、複数のメンバーが個々の能力を最大限に発揮しつつ一丸となって進んでいくような組織づくりや、チームをまとめる手法を指します (日本の人事部,2009)。

参考文献

日本の人事部 (2009) 「用語解説キーワード集 チームビルディング」 <https://jinjibu.jp/keyword/detl/229/> より取得 (2019年1月10日参照)